

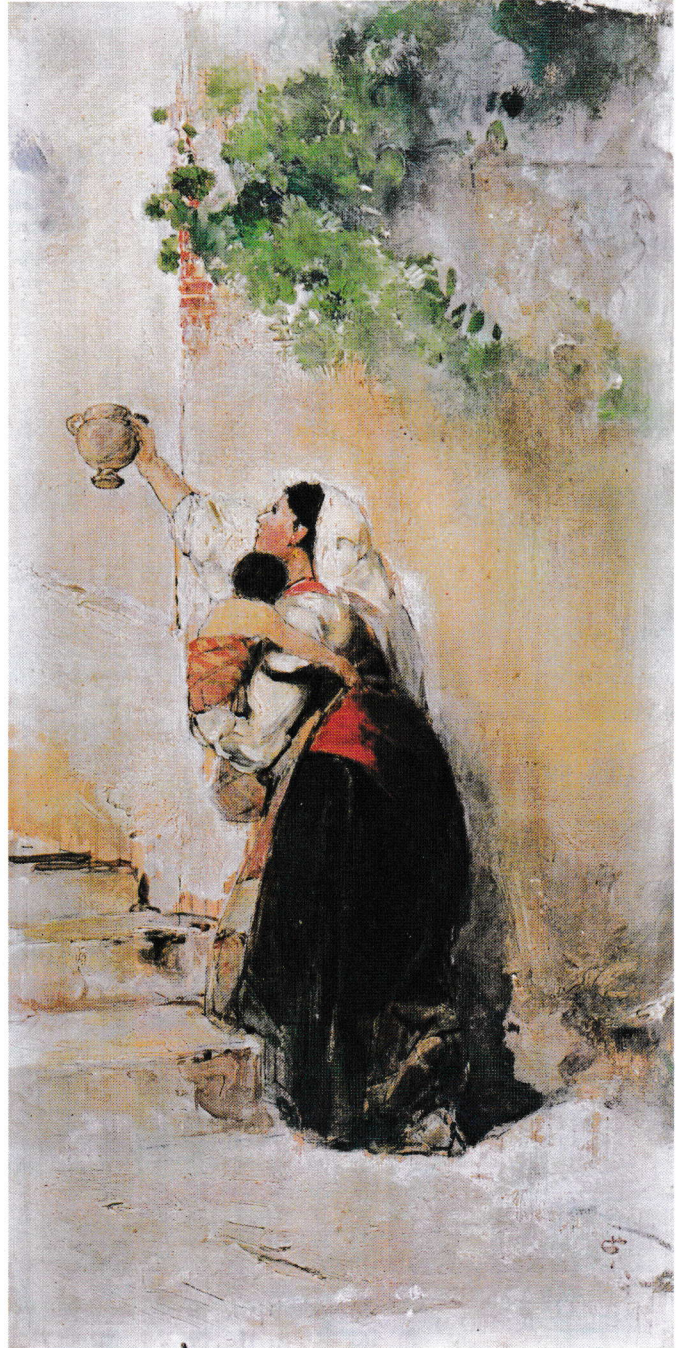
沼津市

# 明治史料館通信

2000. 1. 25 (季刊 年4回発行) Vol. 15 No. 4 通巻第60号



川村清雄書幅(同右)



新たに寄贈された川村清雄画(羽山正一氏寄贈 47cm×23cm)

シリーズ

沼津兵学校とその人材

56

## 洋画家川村清雄と沼津兵学校の人脈

昨年、当館では、静岡移住の経歴を持つ旧幕臣で、日本近代洋画の先駆者の一人である川村清雄（一八五二〜一九三四）の書画の寄贈を受けた。前ページに写真を掲載したものがそれである。

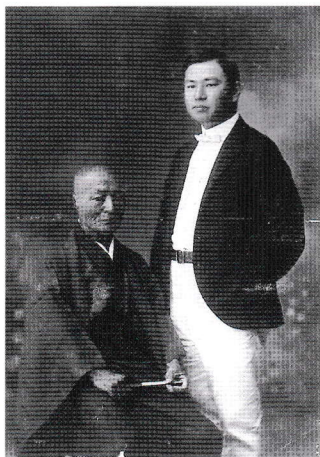
川村が、江原素六夫人と従姉弟の関係にあること、江原家にもその作品や写真が伝来し、当館に収蔵されていることは、本誌通巻第9号で紹介したことがあるし、一九九四年に静岡県立美術館で開催された川村清雄展にも出品した。また、川村家と親類関係にあった旧幕臣には、江原家のほか、羽山<sup>ハヤシ</sup>（沼津兵学校教授、和多田直



羽山<sup>ハヤシ</sup>肖像  
(羽山正吉氏画・羽山正一氏寄贈)



嫁の妻羽山<sup>ハヤシ</sup>荆子  
(和多田寛氏提供)



清雄の父川村<sup>カワムラ</sup>婦元と羽山<sup>ハヤシ</sup>鐘吉(右)  
(羽山正一氏提供)

正(同校資業生)、成瀬隆蔵(同前)、平井参(同附属小学校生徒)らがおり、沼津兵学校の人脈と深いつながりがあったことなどは、系図とともに、やはり本誌通巻第23号、第55号で紹介した。

今回、寄贈された川村清雄の作品は、そんな姻戚関係にあった家の一軒である羽山家に伝来したものである。沼津兵学校で体操を教えた羽山<sup>ハヤシ</sup>（勝四郎・宣孝、一八四七〜七七）の母と、川村清雄の祖母とは姉妹だった上、嫁の妻荆子と清雄とは従兄妹同士の間柄であった。本誌通巻第40号で述べた通り、陸軍少尉となった夫嫁を西

南戦争で亡くした荆子は、キリスト教に入信、やはり従姉妹の夫にあたる江原素六とは信仰上でもつながりを有し、息子鐘吉や娘寿子(江藤氏)を立派に育て上げた。羽山<sup>ハヤシ</sup>鐘吉(一八七三〜一九三六)は神戸で貿易商となり、日本最初のゴルフ場建設の発起人に名を連ねたり、馬主として競馬に力を入れるなど、名士であった。

川村の絵画は、羽山<sup>ハヤシ</sup>鐘吉が間接的に入手したものである可能性もあるが、親戚付き合いの中で、荆子か鐘吉が直接贈られたものなのかもしれない。清雄のご子息川村清衛氏の鑑定によると、この作品は、明治二十年代から三十年代初めにかけて描かれたものではないかとのことであり、極めて早い時期のものである

ることがわかった。絵の右下にある「CK」のサインの形状が、その決め手である。なお書幅のほうは大正期のものらしい。

いずれにせよ、これまで公開されたことのない美術史上の貴重な一品であり、「沼津兵学校」や「江原素六」に連なる静岡移住旧幕臣の人脈が近代日本に果たした幅広い役割を示す資料のひとつとして大切に保存し活用したい。

川村清雄は、静岡藩では年少にもかかわらず二等家従という役職に就き、藩主徳川家達の側近に仕えた。明治四年(一八七二)には、徳川家から選ばれアメリカ留学生となり、他の青少年六名とともに渡航した。留学の目的は語学もしくは法律・政治学を学ぶことだったが、川村は洋画家を目指し後に

イタリアへ渡ることになる。

ところで、川村とともに静岡藩の遣米留学生となった浅野辰夫が、明治二年三月時点で西周の世話により沼津兵学校附属小学校の生徒として学んでいたことが最近わかった(川崎勝「西升子日記」幕末維新期の女性の日記)、『南山経済研究』第14巻第1・2号、一九九九年、四四一頁、樋口雄彦「生徒の手紙が語る沼津兵学校のあとさき」、『徳川慶喜と幕臣たち』一九九八年、一一〇頁)。浅野辰夫は、旧幕時代には神奈川奉行・外国奉行・勘定奉行等を歴任し静岡藩では権大参事の地位にあった浅野氏祐(伊賀守・美作守・次郎八)の子。洋行の際は、東京で西周の饒別を受けている。帰国後の経歴ははっきりしないが、明治二十八年(一八九五)からしばらく、江原素六が校長をつとめる麻布中学校で英語を教えていたこと(『麻布学園の一〇〇年』第一巻)、『教育百科問答第一編 算術之部』(明治二十二年刊)という校閲書があることなどがわかっていく。菩提寺である東京都新宿区・宝祥寺の住職のご教

示によると、辰夫は安政三年(一八五六)五月十二日の生まれ、昭和十一年(一九三六)三月十三日に亡くなっており、以後同家は無縁となっているとのこと。亡くなったのは川村より二年遅いだけであるが、二人の間に交流があったかどうかはわからない。

さらに付け加えておけば、川村とともに渡米した静岡藩士六名とは、浅野の他、竹村謹吾(一八八六年没、静岡学問所フランス語教官竹村本五郎と男爵平山成信の実兄、遺稿『誠齋詩草』)、大久保三郎(大久保一翁の子、東京高等師範学校教授、小野弥一(横浜語学所生徒)、林糾四郎(沼津病院の医師林洞海の四男、静岡病院頭林紀の弟)、名倉納(静岡病院医師名倉弥五郎の子、後沼津兵学校資業生三田佑の妹と結婚)だった。いずれも静岡藩の幹部や洋学系の人物の子弟だったといえる。

(参考文献)

高階秀爾他編『川村清雄研究』(一九九四年)、静岡県立美術館編刊『川村清雄展』(一九九四年)

## ぬまづ近代史点描 ④

### 明治天皇の「聖蹟」——原渡辺家標柱の写真——

東海道原宿の本陣をつとめた渡

辺家に伝来した古い写真に、ここ

に掲載しようなものがあつた。明

治天皇行在所」と記された標柱が

写っている、同家の門前である。

撮影時期ははっきりとはわからない。しかし、以下に掲げる新聞記事(『静岡新報』昭和8・11・3夕

刊)の内容に一致すると考えれば、

昭和八年(一九三三)以降の撮影

ということになる。

御聖蹟に檜柱の

標識を建設通標

明治天皇の御聖蹟を保存し御

遺徳を永久に賛仰し奉るため特

に御皇室と由緒深き本県では曩

に史蹟に指定された御聖蹟四ヶ

所の外七十一ヶ所(外に三ヶ所

調査中)の御聖蹟に檜柱八寸乃

至一尺角の高さ五尺乃至六尺の



原町渡辺家(本陣)の「聖蹟」標柱  
(渡辺勝子氏提供)

標識を建て、永久に県民に御遺徳を偲び奉らしむる事として二日関係各町長村長に通牒を發したが県下の御聖蹟は次の如くである(以下省略)

省略した箇所には、西は白須賀町から東は錦田村にいたる静岡県下七十一箇所の「聖蹟」(行在所・御小休・御野立が置かれた場所)の町村別数が掲載されている。現沼津市域では、原町が御小休一、片浜村が御野立一、沼津市が御小休二。この年、旧静岡御用邸など県内の史跡五件が、史蹟名勝天然紀念物法(一九一九年公布)による史蹟に指定されたことを受けて、静岡県が独自に明治天皇関係の史跡の顕彰を行ったことを報じた記事である。

なお、渡辺家の写真には「行在所」となっているが、明治元年(一八六八)十月七日の東幸、同年十二月十一日の還幸、明治二年三月二十四日の東幸、同十一年(一八七八)十一月六日の地方巡幸の際、原宿ではいづれも本陣渡辺平左衛門(太郎次郎)宅で「御小休」もしくは「御昼」をしたことが明らかである。

従って、この標柱は、「行在所」と「御小休」とを区別せず、宿泊したか宿泊しなにかにかかわらず行在所と表現したのかもしれない。

ちなみに片浜村の小休場所は小諏訪、沼津市の小休場所は清水家(本陣)・中村家(脇本陣)のことである。

皇国史観が支配した戦前期の日本においては、「文化財保護行政は近代天皇制国家に人々をつなぎ留めるための役割を明確に担って」(『静岡県史通史編5』七二二頁)いたのであるが、明治天皇の「聖蹟」とはまさにそのことを示す典型例だった。敗戦後、昭和二十三年(一九四八)、明治天皇「聖蹟」は史跡としての指定を解除された。当然と言うべきか、渡辺家の標柱も現存しない。渡辺家文書の中には、明治元年十二月付のものと思われる、行政官・用度司からの小休手当金の下賜通知などが残る。

(参考文献)  
『静岡県史』通史編5、6、『静岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第11集

### お知らせ欄

◎企画展「むかしむかしの年賀状」の開催について

昨年12月1日(水)からこの1月30日(日)までの会期で開催。年末年始の時期に合わせ、当館で收藏している沼津市内の旧家に



沼津藩主水野忠成の年賀状 (当館所蔵)

残された文書資料の中から、近世・近代の年賀状を展示したものです。沼津藩主水野氏や江原素六・新渡戸稲造ら沼津ゆかりの著名人のもの、日露戦争・関東大震災・十五年戦争など各時代を反映したもので、約一〇〇点です。江原素六宛の大正期のクリスマス・カードも併せて展示しました。

### ◎新収川村清雄作品の展示

新年を祝う昔の人々の素朴な気持ちが見て取れるばかりでなく、当時の歴史的背景などをうかがい知ることができます。書簡や葉書のような私的な文書も、歴史資料になりうるという一例です。

本誌で紹介した、昨年寄贈を受けた川村清雄の油絵を当館一階ロビーのショーケース(資料紹介コーナー)で展示します。展示期間は二月一日(火)から二月二十五日(金)。この機会には是非ご覧ください。

### 沼津市明治史料館通信 第60号

編集 沼津市明治史料館  
発行 沼津市明治史料館  
〒410-0051 沼津市西熊堂三七二-1  
電話 〇五五九-二三三三三五  
FAX 〇五五九-二五三三〇一八